

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520586

研究課題名(和文) 否定のタクソノミーに関する認知語用論的研究 - 記述否定・メタ言語否定再考-

研究課題名(英文) A Cognitive-Pragmatic Approach to Taxonomy of Negation: Revisit to Descriptive/Metalinguistic Negation

研究代表者

吉村 あき子 (Akiko, Yoshimura)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：40252556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：Horn(1985)によって提案された否定の2分法(記述否定(真理関数演算子)vs.メタ言語否定(非真理関数演算子))は、自然言語が本来的に持つ2元性であるとして広く受け入れられている。本研究は、多様な文否定表現形式をもつ日本語のデータに基づき、否定のタクソノミーに貢献する3つの特性(異議性・帰属性・概念性)を抽出し、否定を大きく2分する特性は、Hornのいう真理関数性ではなく、下位表示の帰属性(そしてその結果生じる「異議」という機能)であることを明らかにし、否定のタクソノミーは、機能的・認知語用論的(関連性理論的)見解を取るのが妥当であると結論付けた。

研究成果の概要(英文)：This research proposes that Horn's (1985) descriptive/metalinguistic dichotomy of negation should be replaced with a distinction between OBJECTION and DESCRIPTION, and that the taxonomy with an abstract, logical view of negation should be replaced by a functional, cognitive-pragmatic (relevance-theoretic) view. Horn's descriptive negation (DN) represents a truth-functional operator, taking a proposition p into a proposition not- p , and "metalinguistic" negation (MN) represents a non-truth-functional operator, objecting to a previous utterance. This research extracts three properties that contribute to the taxonomy of negation (i.e. objection as a function, attribution in Wilson's(2000) sense, and the conceptuality of the negation target), and concludes that the 'attribution' of the lower representation (and its resulting function 'objection'), but not truth-functionality, is a crucial property for the dichotomy of sentence negation.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：日本語の否定 メタ言語否定 メタ表示 帰属性(attribution) 異議(objection) 概念性(conceptuality) 関連性理論(relevance theory)

1. 研究開始当初の背景

Horn (1985, 1989, 2001²)の一連の研究は、否定辞(英語の not)には、記述的使用(記述否定)とメタ言語的使用(メタ言語否定)の2つの使用が認められることに基づき、否定辞(not)の語用論的多義性を提案したものである。記述否定は A pig doesn't fly(豚は飛ばない)のような、命題 p を命題 not-p にする真理関数演算子と規定され、メタ言語否定は、She isn't Lizzy, if you please — she's Her Imperial Majesty (お願いだから、彼女はリジーではありません。女王陛下でいらっしゃるのよ)のような、真理条件には影響を及ぼさず先行発話の何らかの側面に異議を唱える非真理関数演算子として規定される。Horn はこの2分法(真理関数演算子の記述否定と非真理関数演算子のメタ言語否定)の普遍性を主張し、自然言語が本来的にもつ2元性であるとして、その通言語的普遍的地位は、これまで広く受け入れられてきた。

2. 研究の目的

さらに Horn はこの2分法が普遍的であることの1つの証拠として、「日本語にはメタ言語否定に特化されているように思われる構造 ワケデハナイ がある('...Japanese does contain a construction, *wake de wa nai*, which seems to be specialized for expressing metalinguistic negation.）」(Horn 2001²: 442)と述べている。

しかし実際は(i)に示すように、ワケデハナイは Horn のメタ言語否定の例において容認されない。一方、同じ文脈でノデハナイは容認される。ところが(ii)に示すように、ノデハナイは命題内容を否定する記述否定にも用いられるので、これもメタ言語否定に特化された表現形式だとはいえない。(*は容認されないことを示す。)

- (i) a. A: 昨日猪を3匹捕まえたんですって?
 B: 私は猪を3匹捕まえた{*わけではない/のではない}。3頭捕まえたんだ。
 b. A: 明日、浩宮さんが来るんだって。
 B: 太郎、浩宮さんが来る{*わけでは/のではありません}。皇太子殿下がいらっしゃるのよ。
 (ii) [家族(父・母・娘)が夕食の食卓について、美味しそうな料理を前に、娘が]
 この料理はママが作ったのではないの。友達のお母さんが作ったのよ。

英語の否定辞 not は記述否定にもメタ言語否定にも用いられるので、英語においては形態だけに基づいて両者の区別をするのは不可能である。それに対して日本語には、not に対応するのは、基本形のナイだけでなく、上記のノデハナイ、ワケデハナイなどといった多様な文否定表現形式が存在し、それぞれ異なる用いられ方をする。つまりそれぞれが異なる特性に反応するのである。そして、そ

の多様な日本語の文否定表現形式の中に、メタ言語否定を過不足なくマークするものがないように思えるのである。これは Horn のメタ言語否定の普遍的地位を再考する余地があることを示唆する。

本研究は、日英比較の視点を取りながら、多様な日本語の否定表現が反応し分ける意味論的・認知語用論的特性を抽出検証することによって、**否定を2大別する真の特性を明らかにすることを目標とするものである。**

3. 研究の方法

(1) 日本語の多様な文否定表現形式に、Horn のメタ言語否定を過不足なくマークするものがないことを再確認し、その候補として観察した日本語の代表的な外部否定表現形式ノデハナイとワケデハナイを、基本形のナイと比較する形で、その特性規定を行った。

(2) 最も広い分布を見せる日本語の外部否定表現形式はノデハナイである。まず、日本語否定文の外側否定のノデハナイに焦点を絞り、コード化されている意味規定を行った。さらにそれらに貢献する特性を抽出。その過程で、否定のタクソノミーに普遍的に貢献する意味論的・認知語用論的特性の可能性を考え見当をつけた。

(3) 次に同じく外部否定表現形式のワケデハナイについて、同じ方法でコード化されている意味規定を行った。

(4) 内部否定を表す基本形ナイにコード化されている意味を確認し、(2)(3)の結果と総合して、内部否定と外部否定を分ける特性、すなわち否定のタクソノミーに貢献する普遍的特性を特定した。

(5) 否定のタクソノミーに貢献する普遍的特性候補の妥当性を検証し、それが人間言語の機能について意味することを考えた。

4. 研究成果

(1) 記述否定/メタ言語否定の2分法は普遍的ではない。左記(i)にデータの一部を示したように、

Horn の挙げるメタ言語否定の具体例に対応する日本語のデータの全てに適用される日本語の文否定表現形式は、ワケデハナイではなく、唯一ノデハナイであること、ノデハナイは、Horn のメタ言語否定だけではなく、(ii)のような命題内容を否定する真理条件的な記述否定においても用いられること、

従って、Horn のメタ言語否定を過不足なくマークする日本語の表現形式はないこと、を明らかにし、

Horn のメタ言語否定と記述否定という2分法が普遍的なものであるという主張に再考の余地があることを示した。

(2)外部否定形式ノデハナイの意味規定。

ノデハナイは、高次の表示としてのノデハナイに埋め込まれた下位の表示が、発話時点の話者以外の誰かに帰属される発話や思考(つまり帰属的表示)であることを要求し、その下位表示に伴われる(命題内容や音声表示、言語使用域、内包、焦点その他を含む)何らかの面に異議を唱える、という意味をコード化する帰属的メタ表示否定(attributive meta-representational negation)である、ことを明らかにした。各特徴については以下に記す。

下位表示が帰属的(attributive)。

(iii)は、高次の表示としての「ノデハナイ」に埋め込まれた下位表示「コストは利益によって相殺[そうさつ]される」が、発話時の話者以外の誰か(ここでは直前の発話者 A)に帰属される発話の表示で、この表示に伴われる何らかの側面(ここでは相殺という漢字の音声表示)に対して異議を唱えるものである、と説明される。(iv)に示したように、下位表示(「アヒルは噛む」)が、誰かが心に抱いたものとは考えられない場合、つまり帰属的でない場合は、基本形のナイは容認されるがノデハナイは容認されないことから、ノデハナイは帰属的下位表示を要求するといえる。

(iii)A: そのコストは利益によって相殺[そうさつ]されます。

B: コストは利益によって相殺[そうさつ]されるのではありません。相殺[そうさつ]されるのです。

(iv) アヒルは {a. 噛まない/ b. ??噛むのではない}。

否定対象に制限なし。

下位表示の命題内容を否定すると真理条件的な否定とみなされるが、その綴りや発音・言語使用域などの命題内容以外の側面を否定する場合は真理条件に影響を及ぼさない。ノデハナイは、上記のように、(ia)(類別詞)、(1.b)(言語使用域)、(iii)(発音)などのような命題内容以外のものだけでなく、(ii)のような「母親が作ったか作らなかったか」といった命題内容をも否定対象にすることから、下位表示に伴われるどのような側面をも否定対象にすることができると言える。

異議(objection)を唱える機能を持つ。

ノデハナイは、上記(ia, b)(iii)のように、帰属的下位表示の何らかの側面に異議を唱える場合には容認されるが、(v)のような異議を唱えていない場合には容認されないことから、ノデハナイは、異議を唱える機能をコード化していると考えられる。

(v)[帰宅して玄関のドアを開けようとして]
あっ、鍵が {かかっている/ ??かかっているのではない}。

以上の考察から、ノデハナイがコード化する意味の特徴を、下位表示の帰属性、否定対象の自由さ、異議を唱える発話機能、と特徴づけた。

(3)外部否定形式ワケデハナイの意味規定

ワケデハナイは、文脈既存の想定 P から帰属的に推論されうる帰結想定 Q を(明示的/非明示的に)伝達する表示を下位表示として要求し、その概念内容を否定することによって当該推論の妥当性に異議を唱える機能をコード化するものである、ことを明らかにした。各特徴については以下に記す。

具体的否定対象は概念的側面(命題内容)。

(ia, b)に示したように、ワケデハナイは下位表示の命題内容以外の側面を否定する場合は容認されず、(vi)のように、下位表示の概念的側面(命題内容)を否定対象にする場合は容認されることから、ワケデハナイの否定対象は、下位表示の概念的側面(命題内容)であると言える。

(vi)[長期海外出張が決まった A が恋人 B に一緒に行こうと言うが B は行こうとしない。]
A: なぜなんだ、お前が東京に残りたい理由は何なんだ。

B: 東京に残りたいわけじゃないのよ。
一緒に行けないだけなの。

(工藤 1997, 一部改変)

下位表示は文脈既存の想定から推論導出可能な帰結。

(viiA2)のワケデハナイの下位表示「A はウイスキーをたくさん飲む(もうとしている)」は、(恐らく)奥さん B が、A1 から「夫(A)はチーズを欲しがっている」ことを知り、これに基づいて推論した帰結である。このように、ワケデハナイは、文脈既存の想定から推論された帰結命題を下位表示として要求する。

(vii)A1: チーズはないか。

B: ありますけど、そんなに召し上がりませんの。

A2: チーズを持ってきたからといって、ウイスキーをたくさん飲むわけではない。

(ibid.)

(vi)も同様に説明される。すなわち、文脈既存の「B が A と一緒に行こうとしない」ことから A が推論した帰結「B は東京に残りたい」を下位表示に取っている。

帰属的推論に異議を唱える。

そして(vi)では、A に帰属される推論(「B は A と一緒に行こうとしない」「B は東京に残りたい」)に異議を唱え、(vii)でも B に帰属される推論(「A はチーズを欲しがっている」「A はウイスキーをたくさん飲む(もうとしている)」)に異議を唱えている。このように、

ワケデハナイは、帰属的推論に異議を唱える場合は容認されるが、(viii)のように、帰属的推論に異議を唱えているとは考えられない場合は容認されない。

(viii)[帰宅して玄関のドアを開けようとして] あっ、鍵が {かかっている} / ??かかっている わけではない。

以上の考察から、ワケデハナイがコード化する意味の特徴を、否定対象の概念性、推論の帰属性、異議を唱える発話機能、と特徴づけた。

ノデハナイは下位表示が帰属的か非帰属的か(話者以外の誰かの発話や思考の表示かどうか)に敏感に反応し、それが概念かどうかについては区別しないため、Hornのメタ言語否定の例を全てカバーする。一方ワケデハナイは、否定対象が概念であるかどうか敏感に反応し、文脈既存の想定に基づく推論の妥当性を否認するのである。

上記の規定は(ix)に示したノデハナイとワケデハナイの交代可能な事例及び交代不可能な事例を適切に説明する。(ix a, b)は、下位表示の命題内容(概念)以外の側面を対象にするものであるため、ワケデハナイは容認されないがノデハナイは容認される。(ix c, d)は、帰属的下位表示の概念的側面を否定対象にするものなのでノデハナイもワケデハナイも容認される。(ix e, f)は埋め込まれるのが非帰属的表示であるため、ノデハナイは容認されないがワケデハナイは容認される、と説明される。

- (ix)a. 私は猪を3匹捕まえた {の/*わけ} ではない。3頭捕まえたんだ。
b. A: 明日、浩宮さんが来るんだって。
B: 太郎、浩宮さんがくる {の/*わけ} ではない ありません。皇太子殿下がいらっしゃるのよ。
c. 体形だけで「江夏二世」と呼ばれてきた {ん/わけ} じゃない(sahi.com. 2007-08-26)
d. 彼は若沖に惚れた {の/わけ} ではない。惚れた作品を求めた結果が若沖コレクションになったのだ。
(YOMIURI ONLINE 本よみうり堂 書評「若沖になったアメリカ人」)
e. この靴が最も得意とする分野はアイスクライミングだ。しかし、アイスクライミングをする場所まで飛行機でひよいと連れて行ってくれる {*の/わけ} ではない。
f. もし上手くいかなくても世界が終わる {*の/わけ} ではない。

以上考察したノデハナイとワケデハナイは外部(外側)否定であり、内部(内側)否定としての特徴を持つ基本形のナイと異なる。これは(x)のテスト結果が示している。

- (x)a. 車が {突然/ようやく} 止まった。

- b. *車が {突然/ようやく} 止まらなかった。
c. 車が {突然/ようやく} 止まった {わけ はない} / のではない。

これは、「突然」や「ようやく」などのようなある種の副詞は、内部(内側)否定形式の基本形ナイでは否定できないが、否定対象の(x a)を、丸ごと外側から否定する外部(外側)否定形式ワケデハナイやノデハナイでは否定できることに基づく。(Kato 1985 一部改変) 外部否定の共通点を抽出する前に、内部(内側)否定の基本形ナイの特性を確認する。

(4) 内部否定形式 基本形のナイの特性

基本形ナイは、**非帰属的**下位表示の**概念的側面**を否定対象にし、**記述**の発話機能をコード化していることを明らかにした。

否定対象は概念的側面

ナイは、(xi)のような下位表示の命題(概念)内容を否定対象にする記述否定においては容認されるが、(xii)のような命題内容以外の側面を対象にするいわゆるメタ言語否定においては容認されないことから、ナイの否定対象は下位表示の概念的側面だと言える。

- (xi) a. アヒルは噛まない。 b. 豚は飛ばない。
(xii) a. *私は猪を3匹捕まえたなかった。3頭捕まえたのだ。
b. A: 明日浩宮さんが来るんだって。
B: *太郎、浩宮さんは来ません。皇太子殿下がいらっしやるんです。

下位表示は非帰属的

ナイは下位表示として、上記(xi)のような非帰属的表示((xi a)の「アヒルは噛む」、(xi b)の「豚は飛ばす」)を取る場合は容認されるが、(xiii)のような帰属的表示(Aに帰属される「Bは東京に残りたい」)を取る場合は容認されないことから、ナイは非帰属的下位表示を要求すると言える。

- (xiii)[長期海外出張が決まったAが恋人Bと一緒にいこうと言うがBは行こうとしない。]
A: なぜなんだ、お前が東京に残りたい理由は何なんだ。
B: *東京に残りたくないの。一緒に行けないだけなの。

発話機能は記述

(v),(xi),(xiiiB)に示したように、ナイの発話機能は記述である。

以上の考察から、内部否定形式 基本形のナイがコード化する意味の特徴を、下位表示の非帰属性、否定対象の概念性、記述の発話機能、と特徴付けた。

以上の結果を、表現形式と特性を書く軸にとって表にすると(xiv)のようになる。

(xiv)

| | (a) 異議性 | (b) 帰属性 | (c) 真 理関数 性 | (d) 否定 対象の 概念性 |
|--------|------------|------------|-------------------|----------------------|
| ナイ | - | - | + | + |
| ノデハナイ | + | + | ± | ± |
| ワケデハナイ | + | + | + | + |

(xiv a)の結果は(xiv b)と並行し、(xiv c)の結果は(xiv d)と並行している。この並行性は同じものの異なる側面を反映している。(xiv a)異議性と(xiv b)帰属性の並行性について言えば、話者以外の誰かに帰属される帰属的下位表示の否定が、異議を唱えるという機能を果たすことは容易に理解できる。下位表示の帰属性が、異議という機能を保証するのである。(xiv c)と(xiv d)の並行性についても同様に説明できる。すなわち、ある表示の概念的側面(命題内容)の否定が、真理条件性に結びつくのは明らかである。以上のことから、否定対象の2つの特性、すなわち帰属性と概念性が、否定のタクソノミーに貢献していることが分かる。

さらに重要なのは、上記の表から、日本語の内部否定(ナイ)と外部否定(ノデハナイとワケデハナイ)の境界と一致する結果を示している特性は、概念性ではなく帰属性だということである。これは、(少なくとも)日本語の否定を大きく2つ(内部否定と外部否定)に分ける特性が、下位表示の概念性ではなく帰属性だということを意味する。

以上のような考察の結果、本研究は、否定の新しいタクソノミーとして、「記述(description)」と「異議(objection)」の機能的2分法を提案し、「帰属性」がこの2分法にとって決定的な役割を果たす認知語用論的特性であると結論付けた。

(5)本研究の意味すること

本研究の結果は、否定を2分する特性として概念性(真理関数性)を取る言語が世界のどこかに存在する可能性を否定するものではない。しかしながら、William James Lectureに始まる Grice の精神(自然言語は、論理言語+推論である 自然言語の基底に論理言語がある)が、自然言語の現象の全てに当てはまるわけではないこと、それも論理学の中心的役割を果たす否定という現象においてそうであること、を示したことになる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4件)

Yoshimura, Akiko, "Relevance and Another Type of Implicature," *Studies in European and American Language and Culture*, Vol. 1, 1-22, Society for the

Study of European and American Language and Culture, the Faculty of Letters, Nara Women's University. (2013.12.30)
Yoshimura, Akiko, "Descriptive/Metalinguistic Dichotomy?: Toward a New Taxonomy of Negation," *Journal of Pragmatics*, (Elsevier, SciVerse ScienceDirect, SCOPUS Journal) Vol.57, pp. 39-56 (2013.10). (査読有)
吉村あき子(単著),「日本語の外部否定表現再考」『ことばを見つめて』, pp. 511-525, 英宝社, 東京 (2012. 3. 14)
吉村あき子(単著),「関連性理論 発話解釈モデルと認知科学的志向性」, 『日本語学』(2011.11 臨時増刊号) Vol.30-14, pp.106-114, 明治書院, 東京 (2011. 11. 15)

[学会発表](計 3件)

Yoshimura, Akiko, "Relevance and Another Type of Implicature," The 16th Annual Conference of Pragmatics Society of Japan, Oral Presentation, Symposium on 'Implicature,' (at Keio University, Tokyo, JAPAN), (2013. 12. 08).

Yoshimura, Akiko, "Attribution and Japanese Negation," 13th International Pragmatics Conference, International Pragmatics Association, (at India Habitat Centre, New Delhi, INDIA), Lecture, (2013. 09.09).

Yoshimura, Akiko, "On Attribution," The 3rd Nara Women's University Linguistics Seminar, Oral Presentation, (at Nara Women's University, JAPAN), (2013. 08. 07).

[図書](計 2件)

三原健一・高見健一(編著), 窪園春夫・竝木崇康・小野尚之・杉本孝司・吉村あき子(共著), 『日英対照 英語学の基礎』, 第7章語用論 (pp. 177-206) 担当、くろしお出版, 東京 (2013.11.22)

吉村あき子・須賀あゆみ・山本尚子(共編著), 『ことばを見つめて』, pp. 1-535+vi, 英宝社, 東京 (2012. 3. 14)

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉村 あき子 (YOSHIMURA, Akiko)
奈良女子大学 研究院 人文科学系・教授
研究者番号: 4 0 2 5 2 5 5 6